

報徳博物館

友の会 だより

No.68



「二宮尊徳翁誕生地栢山道」碑



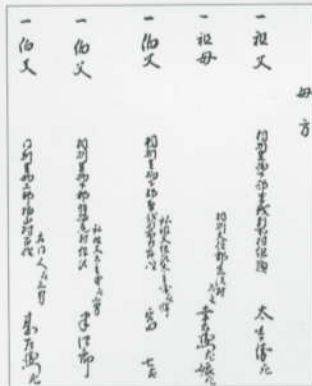
みきもとこうきち
御木本幸吉は尊徳を敬慕し、「尊徳が陸でやったことを海でめざしたい」と発奮、後に「真珠王」と呼ばれるようになりました。また、幸吉は明治42年（1909）、当時、荒廃していた尊徳生家の敷地を買い取って整備します。これらのことについては、すでに『友の会だより』でも何度か取り上げています。

ところで、生家敷地の整備と同時に、幸吉は現在のJR御殿場線松田駅に尊徳生誕地への道標を建立します。道標は後に移転され、近年では、その存在を知る人すら少なくなっています。本号の「調査・取材ノートから」の欄に、この道標に関する記事を掲載しましたので、ご覧ください。

調査・取材ノートから

◆尊徳の叔父 羽根尾半四郎家

『二宮尊徳全集』の日記や手紙の中にしばしば登場する「おはや」という女性を調べていたら、この女性、羽根尾半四郎とか押切半四郎とかいう人の娘だと分かりました。さらに調べていくと、この半四郎なる人物、尊徳の母よしの弟で、羽根尾村の組頭を勤め、尊徳が弘化2年(1845)に幕府へ提出した親類書(右写真)には、伯父と記載されていることが判りました。姓は「早野」と判



ったので、早速、小田原市橋の羽根尾地区で、早野姓のお宅を尋ねました。半四郎という名前で、案外容易に尋ね当てることが出来ました(右写真)。



80歳代に見える老婦人からお聞きした話を次に要約します。

- 昔は書いた物も沢山あったけど、改築を重ねるうちに無くなってしまった。一部は小田原城天守閣に預けてある。
- 昔は代々半四郎を名乗っており、この婦人のお舅さんも半四郎で、腕の良い医者だったそう。
- 尊徳さんは、よくうちに寄られたそうだけど、うちでは、門口に藁を釣るして置いて、いつでもそれを使って草鞋を直せる様にして置いたそうである。

この羽根尾という地区は、現在の小田原市の東端に位置し、現在の中郡二宮町川匂地区と境を接する東海道筋にあります。当時の尊徳が、小田原と江戸、あるいは野州(栃木県)と往き来する際には、多分ここを通ることが多かったであろうから、同家に立ち寄ることもしばしばあったのでし

よう。

同家の菩提寺は二宮町の川匂山密厳院だそうですが、墓は、同家から国道へ出て海側へ横断して直ぐ左側の共同墓地に所在し、法名は「寿翁長善信士」とあり、没年は安政6年(1859)9月11日、87歳とあります。尊徳が亡くなった3年後に、法名が示すように、当時としては大変な長寿を全うしたことになります。因みに、墓石によると、夫人のフサさんは、半四郎の没後わずか8日後の同年同月19日に、76歳で夫の後を追うように亡くなったことも判ります。



◆二之宮先生の門人 酒井儀左衛門の墓

小田原市酒匂2-44-27 上輩寺

東海道(1号線)の酒匂県営住宅入口交差点の



手前左側のこのお寺に「二宮尊徳の門人の墓」がある、と聞いて調査に行きました。

山門を入れて左手奥の方にある大いちょう(小田原市指定文化財)の側に目指す墓石(左写真)がありました。

沓石正面に「酒井家」とあり、墓石の

正面上部に四ツ菱の紋、その下右側に「大音院響阿流聞信士」、その左側に夫人と思われる「大醫院響弍浄鏡信女」と法名があり、左側面には二之宮先生之門人 酒井儀左衛門墓 酒井常次郎立之

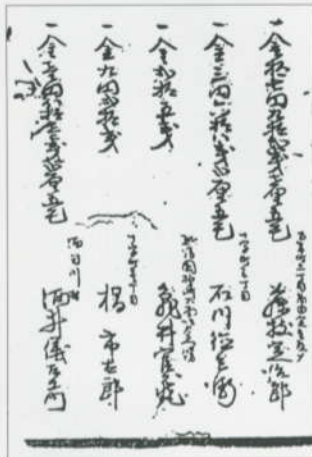
とあります。没年は右側面に

明治三十七年九月十六日

とあります。

この人物を『二宮尊徳全集』の中から探してみました。すると、尊徳が、小田原の仕法打ちり後の残務処理と先祖の墓参のために、箱根塔之沢の福住喜平治方に滞在した嘉永5年(1852)2月17日の日記に、次のような記事がありました。

「酒匂村儀左衛門、御機嫌伺として罷出、尤もそない持参、弥太郎面会致し差し戻し候」御機嫌伺いとあるから、尊徳とは初対面ではな



かったのでしょうか。だが、尊徳は不在だったのが、多忙なのが、嫡子弥太郎尊行に会って帰ったようです。この時以外に日記にも酒匂村仕法関係資料中にも彼の名を見付けることは出来ませんでした。

ところが、明治11年(1878)の小田原宿報徳社の『報徳土

台金惣高取調帳』や『三才報徳現量鏡』の随所に彼の名前を見付けました。明治29年ごろからはブツリと名前が出なくなりますが、少なくとも明治中期ごろまでは、彼は正真正銘、小田原報徳社の社員だったわけです。門人がどうかは別にして、彼は人一倍尊徳に私淑する気持ちが強かったのでしょう。小田原には、まだまだこういう隠れた報徳人というか、表には出ていない熱心な報徳人がいたのかも知れませんね。

◆JR松田駅北口の御木本幸吉建立の碑

御殿場線松田駅に御木本幸吉建立の「報徳碑」を取材しました。最初は駅員も、駅前の観光協会事務所でもその所在は不明でした。2度目に行った時、駅員の1人が「あれは駅じゃなくて駐車場の方です」とのこと。なるほど、境界フェンスの外にひっそりと立っていました(表紙写真)。



ホームの方を向いて、「二宮尊徳翁誕生地栢山道約一里半」と彫られ、土台石を含めて地面からほ

ぼ4メートルもあろうかと思われる花崗岩製の立派なものです。裏面には「明治四十二年六月建之」とあります(左下写真)。この当時は、まだ東海道線は山北・御殿場回りでした。もちろん小田急も通じていない時でしたので、遠方から尊徳生誕地を訪ねるには、松田駅で下車して栢山まで、酒匂川を渡り、吉田島・曾比の田圃道を約6キロメートルも歩いたわけです。御木本幸吉が、そんな人たちの便宜を考えて建てたのでしょうか。

近くにいた年配の女性の話によると、真珠王は自分の名前は「売名行為になるから」と彫らなかったと言われてます。昔の人は偉いですね。又、この碑は、元はホームの一番東京寄りにあったのが、戦後いつの日か反対側の山北寄りの、しかもこんな所に移されて、知っている人もほとんどいなくなってしまっ—とのことでした。

トピックス

◆“尊徳(金次郎)修学の地”の案内板立つ

このたび、報徳博物館の前に写真の様な高札風の檜造りの案内板が立ちました。



金次郎は文化8年(1811)25歳の時から、小田原藩家老服部家の若党として奉公しました。

彼は、同家の若様が漢学の塾に通うお供をして小峰坂と呼ぶこの博物館前の道を往き来しました。塾では、漏れてくる講義を聞いて理解しました。

又、館のある場所には、近藤という書物を多く所蔵する藩士の屋敷がありましたが、金次郎は、よくここに寄っては「米を研がせて下さい」と言っ—は、そのお礼に書物を読ませてもらったという逸話があります。

こうして金次郎は、学問を深め広めていきましたが、こんな縁の地に報徳博物館は建っているのです。これが新観光スポットになり、博物館に大勢を呼び込んでくれるといいなと思います。

資 料 紹 介

少年金次郎像といえば、大方はまず、薪を背負って本を読む、あの姿を連想するでしょう。それほどまでに「負薪読書」姿の金次郎像は一般的なイメージとして普及しています。しかし、金次郎像の造型は決して固定してはいません。以下に、珍しい金次郎像を2点ご紹介します。

◆尾形月山「二宮金次郎月下読書図」

家の外に筵を敷き、草鞋を編みながら本を読む金次郎。本は藁打石の上に置かれ、見やすい角度



を保つために藁の束があてがわれてあります。金次郎の前には藁打石も見えます。左上の月の明かりが、画面全体を柔らかく包みこんでいます。季節は秋でしょうか。

金次郎の手は休むことなく、草鞋を編んでいます。目は本の一節に吸い寄せられています。やや前屈みになった姿勢が、夜業と勉強との双方に余念のない金次郎の様子を見事に描き出しているといえましょう。

少年時代の金次郎に実際、このような場面があったのかどうかは不明です。ただ、当時の農民にとって、草鞋作りは日常的な仕事であり、必ずしも、手元を注視する必要はなかったでしょう。その意味では、説得性のある構図なのです。また、この場面には、文部省唱歌『二宮金次郎』の「柴刈り縄ない草鞋をうづくり」の一節が踏まえられているとも考えられます。

作者の尾形月山は、明治20年(1887)9月10日東京京橋に生まれ、昭和42年(1967)12月27日に80歳で亡くなっています。金次郎・尊徳を題材とした彼の作品がこのほかにもあるのか否かは、今のところ不明です。

◆小山栄達「二宮金次郎牽馬読書図」

左手で手綱を引きながら、右手に持った本を読む金次郎。馬の背には、刈り取って束ねた柴を左右に振り分けた形でくり付けてあります。栢山村の西方に位置する入会の山からの帰り道の情景なのでしょう。山道が終わり、平地になったところで、金次郎は懐から本を取り出したのかもしれませんが。

ところで、貧乏の代名詞ともいえる少年金次郎が馬を飼っていたとする想定には違和感を持つ人も多いでしょう。とすれば、この絵の中の金次郎は、他人から馬を借りたのか、もしくは、他人の手伝いをしていることになるのでしょうか。また、柴刈りで使ったはずの鎌が見当たりませんが、これは、金次郎が帯の後ろに差しているのが、画面からははずれた柴の束の中に差し込んであるという見立てなのでしょう。

作者の小山栄達は、明治13年(1880)3月東京小石川に生まれ、昭和21年(1946)に亡くなりました。栄達はほかに、一般的な「負薪読書」姿の金次郎像も描いています。

尾形月山・小山栄達作品を珍しい金次郎像として紹介しましたが、両者とも、主題は働きながら勉強するというもので、その点に新奇さはありません。そこを逸脱すると、少年金次郎の画像表現は成り立たないのでしょうか。さらに新資料を発掘し、検討する必要があるようです。



発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250-0013 小田原市南町1-5-72
電話0465(23)1151・振替00250-6-24450